

## 説教 「荷物は一つより、二つのほうが」

(大泉バプテスト教会 10月31日礼拝 上林順一郎)

最近、若い牧師たちの間で話題になっている本があります。小さな本で題名は『お寺の掲示板上』です。若いお坊さんが全国のお寺の掲示板上に書かれているもので面白い言葉や話題になっているものを集めたものですが、「はっとしたり」、「なるほどなあと」思わされたり、つい笑ってしまうものもあり、結構話題になっている本です。たとえば、「人の悪口は、ウソでも面白いが、自分の悪口は、ほんとうでも腹が立つ」 まったくその通りですね。「他人と過去は変えられないが、自分と未来は変えられる」フム、フム、なるほど。「風呂は湯加減、医者 はさじ加減、人生は手加減、わたしゃ、いい加減」 こんなことを書くお寺の坊さんの顔が見たいですね。

この本を書いたお坊さんは「仏教も、キリスト教も、信者離れが深刻な問題になっています。坊主がお経だけを唱え、牧師が説教だけをしていても、人々は信仰に関心を持たず、お寺も教会もさびれるばかりです」と、今の宗教の現状を憂えています。そこで、お寺の掲示板上で人々に直接訴えるような言葉が大切だと考え、全国のお寺の掲示板上に書かれている言葉を集めて紹介しているのです。

ところで、お寺と同様にたいていの教会にも掲示板上がありますが、そこに書かれている言葉はどうでしょうか？多くの場合、聖書の言葉の一節か、あるいは日曜日の説教題が書かれているのが多いようです。しかし、その掲示板上に書かれている聖書の言葉や説教題を見て、共感したり、心にじんときたり、そして教会に行ってみようかと思う人がどれほどいるのでしょうか？教会の看板には人を引き付けるような魅力的な言葉が少ないのは残念ですね。

とはいえ、日本の教会の掲示板上に書かれている聖書の言葉でも人気のあるものがあります。それは先ほど読んでいただいたマタイによる福音書 11章 28節「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」という言葉です。おそらく、日本の教会の掲示板上で最も多く書かれている聖句でしょう。事実、この言葉を見て教会に初めて来る人も多いのです。この聖書の言葉は私たちの心に訴えるものがあるからです。

いまようやくコロナの感染が収まりつつありますが、この2年近くコロナ禍によって自粛生活を余儀なくされ、仕事や学生生活もまともに行うことができず、家族との関係もぎくしゃくし、心身共に疲れを覚えている人々が多くなっています。また、経済的な不況や失業なども起こり、貧富の差が増大し、生活苦という重荷を負って毎日を生きている人々が多くなっています。仲間や友人と

の会話や交流もなくなり、どこに助けを求め、だれに安らぎを求めようかと悩んでいる人々が多くなっています。みんな、どこか疲れて来ています。心だけでなく、からだも疲れを覚えることが多くなり、イライラが増え、心の安らぎが消えつつあります。

このような時代にあって、「疲れている者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」のイエスの言葉は慰めと安らぎに満ちた言葉となります。特に、「休ませてあげよう」という言葉は心に滲みるものです。イエスのもとに行けば、すべての疲れが癒され重荷から解放され、休息が与えられる、こう約束されているからです。多くの教会が掲示板でこの言葉を掲げているのも当然のことでしょう。それは教会が人々に最も訴えようとしているメッセージだからです。そして事実、この言葉のような慰めと癒しを求めて教会に来る人も多いのです。しかし、それはイエスの言葉を半分だけしか理解したことになるのです。

というのは、「休ませてあげよう」と、イエスは言っていますが、この言葉は疲れや重荷を背負って労苦している人をただ単に「休ませる」、「休息を与える」という安楽を与えることを言っているのではなく、「再び元気にしてあげよう」という積極的な意味を持っているからです。

イエスは「休ませてあげよう」と言った言葉にすぐ続いて「私のくびきを負いなさい」と語ります。「私のところにきたら、ごろっと寝転がって、休んでいていいのですよ」とは言っておられるのではないのです。反対に「私のくびきを負いなさい」と言っています。重荷を背負って疲れ、苦しみ、あえいでいる人に向かって、さらに私のくびきを負いなさいと、新たな重荷を負うことを命じているのです。「イエス様、それはないでしょう」と言いたくなります。一体、どういことでしょうか？

「くびき」というのは、最近では見ることはありませんが、昔は田畑で作業をする二頭の牛や馬をつないでいた横棒のことです。一頭だけでは作業するのが困難な時には、二頭の首の部分を横木でつなぎ、二頭を一緒に働かせるための棒のことです。一頭が負っていた作業を二頭で分け合って行うことで一頭の負担は半分になり、作業は2倍になるのです。イエスは「私のくびきを負いなさい」と言います。重荷を背負って歩いている私たちがイエスのくびきを共に負うことによって、私の重荷が軽くなるのです。イエスが私の重荷の半分を背負ってくださるからです。

北海道の遠軽という町に「北海道家庭学校」という施設があります。ここはいろいろな事情で家庭にいたことができない子供たちや、法に違反する行為でこの施設に送られてきた子供たちが家族のように一緒に生活しながら、人間としての学びを行う場所です。ここにいる子どもたちは家庭や学校や社会から追い

出され、長年にわたっていろいろな重荷を背負って生きてきた子供たちです。そのような子供たちの重荷をともに背負って生活を共にしている校長の谷昌恒さんは「ひとむれ」という本で次のように書いています。

「大きな荷物一つ肩に担ぐと重いのです。振り分けるか、天秤棒の二つの荷物は軽いのです。自分は、自分のことだけで精いっぱい、人のことなど構ってられない、そんな風に考え、自分一人の荷物にしがみついていると、荷物はずっしり重いのです。あの人は自分のことだけで、大変なはずだと、そう思われている人が、多くの人の心配事を担い、力を貸し、共に労を分かち合っている。本人は平気な顔をして、他人の重荷を担っている。他人の荷物を負っていることで、気が張るのか、責任を感じるのか、確かに荷物は一つより二つのほうが軽いのです」

二頭の牛や馬がくびきでつながれて大きな荷物を引っ張っていく時、足の速い方が足の遅い相手と同じ速度で歩くこと、力の強いものが力の弱いものの歩調と合わせることで、それがコツだそうです。

わたしたちの重荷をくびきを共にして担ってくださるイエスは「わたしは柔和な者である」と言われます。「柔和」というのは優しく穏やかであるという意味もありますが、本来は「無力であり、無一物である」という意味です。イエスはゆっくりとした遅い歩調で歩まれる方です。だからわたしたちの重荷が重くてもイエスの歩調に合わせて歩くことができるのです。いや、私たちの歩調に合わせてイエスは歩いて下さっているのです。

谷さんはこうも書いています。「荷物が一つより、二つの方が軽いのは、いつの間にか神様が背後から近づいてきて、そっとその荷物を支えてくださるからだとは思うのです。多くの人の荷物を背負って苦闘している人、きっと神様が一緒になってその荷物を背負ってくださっているのです。だから軽く感じるので」谷さんはクリスチャンです。

荷物は一つより、二つの方が軽いのです。自分の重荷だけで苦しんでいるのが私たちです。他人の重荷のことなど考えておられないと、自分の重荷だけをふうふう言いながら背負っているのです。しかし、谷さんの言うように他人の重荷と一緒に背負っていくとき、自分の重荷が軽くなっているのを知っているのでしょうか。それは神様が一緒になって重荷を背負ってくださっていることを知っているのでしょうか。荷物は一つより二つの方が軽いのです。

最近、『お寺の掲示板』の続編が出版されました。その中にあった言葉です。

「人は歳をとるにつれて、自分には二つの手があることに気づきます。一つは自分自身を支えるため、もう一つの手は他の人を支えるため」

オードリー・ヘップバーンの言葉だそうです。